

第6回海外研修／ 6th Overseas Study Tour  
(於韓国) ／ in Korea  
November 2009

【日本「アジア英語」学会ニュースレター第30号  
より

Excerpt from JAFAE Newsletter , No. 30】

## 2009 年度JAFAE 海外研修報告

樋口謙一郎 (栃山女学園大学)

本学会は 2009 年度海外研修を、2009 年 11 月 22 日から 25 日まで「韓国視察・研修旅行」として実施した。研修には、本名信行会長をはじめ、日本各地から 10 人の会員の参加を賜ることができた。世話人（訪問団長）は、僭越ながら筆者が務めた。

今年度の研修は、韓国の英語教育現場の視察を中心とし、市内の視察も盛り込んだ。以下、本報告では、視察先と視察の概要を訪問順に紹介する。各視察先での具体的な見学・活動内容のレポートは、河野円先生、木村隆先生が詳しく記してくださいので、そちらをご覧いただければ幸いである。

### 1. 安岩初等学校 (23 日午前)

前日（22 日）のウエルカムディナーで顔合わせをした我々は、23 日朝から早速視察を開始した。まず、訪れたのは「安岩初等学校」である（初等学校とは小学校のことである）。学校所在地に少々早く着いた我々は、近くの高麗大学校のキャンパスをバスで見学した後、学校を訪問した。

安岩初等学校ではまず、李旼成校長先生が、韓国第7 次教育課程の部分修正・実施の動向と、安岩初等学校の英語教育の特色についてレクチャーしてくださいました。韓国の初等学校における英語の授業は、現在は 3・4 年生が週 1 時間、5・6 年生が週 2 時間であるが、教育課程の部分修正を受けて 2010 年度から 3・4 年生が週 2 時間、さらに 2011 年度か

らは 5・6 年生が週 3 時間となる。安岩初等学校はソウル特別市教育庁から「英語教育先導学校」に指定されており、予算の重点配分を受けて校内に英語体験施設を設置し、放課後教育として補習班や 1 年生からの英語クラスも設けているという。ネイティブ教員もソウル市 教育庁の採用による 1 人に加え、独自予算によってもう 1 人を確保しており、「先導学校」の役割として、近隣地域の児童が放課後などにこの学校で英語を学ぶことも可能にしている。

我々は校長先生にご案内いただき、実際の英語授業 2 クラスを見学したほか、英語教員との簡単な懇談や、この学校の英語教育の取り組みを紹介する映像を観覧することもできた。

### 2. ソウル国際高等学校 (23 日午後)

第 2 の訪問先は「ソウル国際高等学校」であった。ここは、2008 年に開校したばかりの全寮制の公立高校で、多くの科目を英語もしくは英語・韓国語のバイリンガルで行われている。韓国には従来、英語科、仏語科などを置く「外国語高等学校」があったが、この国際高校は語学の重点強化よりも、グローバル人材の育成という観点から、道具としての英語を鍛えるカリキュラムとなっている。イ・ビヨンホ校長先生、チエ・チュンオク教監先生のあいさつと学校概要紹介の後、校内見学の形式でいくつかの教室を見てまわった、英語以外にも、第 2 外国語の中国語や経済の授業の水準・スピードには驚かされた。1 年生の中国語は、学習開始から 8 カ月程度のはずであるが、すでに中国語学習の大きな難所である“ 把”構文を学んでいた。経済は、米国の大学 1 年生の英語の教材を使用し、Ph.D を持つ韓国人の先生が英語のパワーポイントを使って韓国語で授業を行うというユニークなものだった。

### 3. アリラン放送局 (23 日午後)

第 3 の訪問先は「アリラン放送局」であっ

た。ここは、韓国国際放送交流財団が運営する国際テレビ・ラジオ放送局で、韓国居住外国人や在外コリアンに向けた英語をはじめとする多言語のプログラムを、テレビ、ラジオ、そしてインターネットを通じて、24時間提供している。ここは、当初の訪問予定にはなかったが、この機会にぜひとも見学を依頼したところだ。

放送局だからスタジオや制作フロアも見学させていただいた。これだけでも高校の修学旅行のようで楽しかったが、ラジオスタジオでは、文字通りのサプライズが発生した。生放送中の放送席に、視察中の本名信行会長が招き入れられたのである。韓国フォーク界のリヴィングレジェンド、ハン・デス氏のゴキゲンなトークとともに、本名会長は JAFAE の紹介をされ、本学会の存在と意義を世界に知らしめたのである。これには参加者一同、大興奮であった。

#### 4. 京畿英語村坡州キャンプ（24日午前）

日付が変わり、翌 24 日もなかなか忙しかった。まず、訪れたのはソウル市内から車で約 1 時間半の京畿道坡州（パジュ）市に位置する韓国最大の英語村「京畿英語村坡州キャンプ」である。ここは、学校教育の補完、グローバル人材の育成を目的として、京畿道が運営している英語体験空間であり、欧米風の銀行や商店などが設置された敷地内では基本的に英語を使用することになっている。京畿道には、安山、坡州、楊平の 3 個所にキャンプがあり、今回訪問した坡州キャンプは韓国の英語村のなかでも最大規模の施設である。この日の見学は朝の開園直後のことであり、また新型インフルエンザの流行ですべてのプログラムを休止しているとのことで、施設内では人影もまばらだった。

ところが、ここにもサプライズが待っていた（世話人の筆者もまったく知らされていなかった）。園内を一周した後に案内された会

議室に、このキャンプで 1 カ月間の英語教師研修を受けていたる中学・高校の先生方との懇談のテーブルが用意されていたのである。世話人は突如進行役を委ねられて慌てたが、先方、当方参加者とも和やかな雰囲気のなかで両国の英語教育の現状について意見交換を行い、大変有意義な時間となった。（※京畿英語村坡州キャンプについては、筆者は今回の研修にもご参加いただいた木村隆先生とともに 2008 年にも訪問しており、その際の考察を次の論稿にまとめているので、ご覧いただければ幸いである：樋口謙一郎・木村隆「韓国の『英語村』—現状と展望—」、『中部地区英語教育学会紀要』第 39 号・近刊、所収）

#### 5. ソウル近郊・市内観察（24 日午後）

以上で、教育機関や放送局などの訪問は終わり。後の時間帯は、観光を兼ねて「オドウ山統一展望台」と「昌徳宮・秘苑」を観察した。上述の京畿英語村坡州キャンプの近くにあるオドウ山統一展望台は、川の対岸に位置する北朝鮮の農村地帯を肉眼でも見ることができ、南北分断の現実がよくわかる場所である。施設内には、北朝鮮の日常生活や学校教育の紹介などもあり、英語教科書も展示されていた。ソウル市内に戻って訪問した昌徳宮・秘苑（世界文化遺産）は、現地で設定されているツアーに参加しなければならないところである。日本語ツアーもあるが、今回は、事前に「韓国人の英語に接してみたい」との希望も多かったため、あえて英語のツアーに参加した。

#### 6. 韓国デジタル情報図書館（25 日午前＝エクスカーション）

25 日朝の「解散式」をもって研修の公式プログラムは終了した。ただ、最終日は、帰国便まで時間に余裕のある参加者もいたため、エクスカーションとして、2009 年 5 月に開館したばかりの「デジタル図書館」（Dibrary）の見学を催行した。国立中央図書館の前庭のスペースを利用してつくられたこ

の国立の電子情報図書館は、書庫スペース不足や、電子情報の蓄積・整理・利用の方法の確立といった問題に対する韓国の取り組みとして、大変興味深かった。当日はあいにくの土砂降りのなかをタクシーに分乗して訪問したが、我々の滞在ホテルからも近く、訪問するだけの価値は十分にあったように思う。

### まとめ

今回の研修では、韓国ができるだけ新しい取り組みを見ることができるよう調整したということもあり、英語教育の先進的な部分を垣間見ることができた。韓国で公教育をはじめ社会の各分野で英語への取り組みが進んでいることについては、その「原因」と「結果」の両方において、韓国人の英語熱の高まりがある。また、英語教育の推進によって生じうる教育の機会と結果の不平等や、政策と実態の乖離といった問題は、韓国だけでなく日本でも考えていくべきものである。今回の研修で視察したのは、中央政府や自治体、公的団体による英語化推進という「公的事業」、それも「先進的な取り組み」の面であり、個人的には韓国のいわゆる「私教育」や早期留学に関する現場・実態について、今後さらに観察と考察を深め、日韓における「アジア英語」の意義や可能性を考えていきたい。

研修時、韓国では新型インフルエンザの流行が「深刻」レベルに達し、その影響でこの旅行も無事催行できるかどうか、世話人としてはおおいに心配したが、韓国教育科学技術部や視察先の方々の御協力により、最後まで予定変更もなく実施することができた。誠に感謝にたえない。また、ガイドの裴志瑛さん、アシスタント役を務めてくれた吉田智晃氏、パンフレットなどを作成してくれた筆者のゼミ生の皆さんにも感謝申し上げる。そして、ハードなスケジュールにもかかわらず、最後まで和やかで楽しい雰囲気で研修を盛り上げてくださった参加者の皆様、ならびにこの研

修をサポートしてくださった JAFAE 会員の皆様にも厚く御礼を申し上げたい。

### エリート英語教育を目指す小学校と高校を訪問して

河野 圓（星薬科大学）

日本「アジア英語」学会に入会して日も浅い 2009 年 11 月 22 日から 25 日まで、韓国視察・研修旅行に参加した。有意義で貴重な見分を得た 4 日間であったが、ここではトップクラスの英語教育を目指す小学校と高校訪問についてご報告し、若干の感想を加えたい。

まず、最初に訪問したソウル市内の安岩初等学校では、通常の英語の授業に加え、Giant English と呼ばれる英語センターで、放課後、希望者を対象に英語の授業が行われている。我々は、ネイティブスピーカーの先生と韓国人の先生のチームティーチングで行われている小学校 4 年生と 5 年生の英語の授業を参観した。生徒数は 1 クラス 25 名前後、基本的に英語で授業が行われており、生徒は先生の英語の指示を、パターン化したクラスルームイングリッシュとは言え、概ね理解しているようだった。新鮮な驚きだったのは、授業の最初の部分で韓国人の先生が、教室のホワイトボードに Objective として、Students will be able to role-play using expression of suggestion and refusal. と書いた長い紙を張ったことであった。先生は、韓国語で一言二言、説明を加えて、その後すぐ英語に戻ったが、この英語の目的の紙は、子どもたちに知的刺激と明確な目的意識を与えていたと思えた。教室内の教員と生徒が学習目的を理解し、共有し、グループ活動や全体活動を通じた協働の中で目的を達成していくとする姿勢がうかがえた。

Lee Hyu Seong 校長先生のお話では、今後レベル別クラスを編成し、英才教育型のプログラムを作りたいとのことであった。英才クラスと

して、帰国生や地域で能力の高い児童選び、1クラス8人のクラスを2つ作る予定とのこと。公立の小学校の校長がこのように英才教育を推進することは、日本の教育現場にはあまりない発想であり正直驚いたが、次に訪問したソウル国際学校ではさらにその驚愕の度合いは高まり、圧倒され放しとなるのであった。

ソウル国際高等学校 (Seoul Global High School) は、開学して2年足らずの公立の寄宿学校で、世界のリーダーとなるエリートの韓国人を育てるというモットーのもと、1学年あたり6クラス154人の生徒が学んでいる。国際コースと一般コースの2コースがあり、前者は、韓国のみならず世界の名門大学に生徒を進学させることを目的とした、英語のイマージョン教育を行っている。英語以外にも、全員、中国語かスペイン語を学習することになっていて、学校を案内してくれた女子生徒は日本に留学経験があり日本語が大変流暢で、梨花女子大に飛び級で入学が決定しているとのことであった。見学した授業の中でバイリンガリズムを研究する者として特に興味を持ったのは、アメリカの高校のAP (Advanced Placement) レベルの教科書を用いた「経済」の授業であった。英語のパワーポイントも使用し、Ph.Dを持つ韓国人の教師が韓国語で説明をなさっていた。学校を案内して下さったHa Hwa-ju先生は、「母語の発達も大事であり、この授業では内容を母語で理解しているかを確認している」と述べられた。これは新たな概念を第一言語と第二言語で確認するというイマージョン教育の手法の一つである。日本の大学で求められているESP教育の観点からも、是非もう一度訪問したい、という強い思いを胸にこの高校を後にした。

これらの学校訪問を通して、韓国では能力のある生徒を選別し、彼らに財政面、あるいは人的資源の面で手厚く援助をし、社会のリーダーやエリートとして養成しようとする、国家戦略としての教育のビジョンがはっきりと見てとれ

るのであった。

言語習得や英語教育に関して大きな示唆を得られた今回の視察見学であった。最後に、団長の樋口謙一郎先生には企画と実行に際し辛いところに手が届くご配慮を頂き、また、随所で通訳を務めて下さったことに厚くお礼申し上げたい。

### パジュ英語村・アリラン放送・デジタル図書館を訪問して

木村 隆 (相山女学園大学)

河野先生と同じく、私も日本「アジア英語」学会に入会して間もない者である。本研修旅行世話人で勤務先の同僚でもある樋口先生に誘われて参加した。私からは11月23日に訪れた「アリラン放送」と、24日の「京畿英語村パジュキャンプ」、そして25日に訪問した「デジタル図書館 (Dibrary)」について報告する。

ソウル国際高校の後に訪問したアリラン放送は、韓国の国際放送交流財團によって設置された国際放送で、韓国に関するニュース、文化、教育、娯楽などの番組をテレビやラジオで全世界に配信している。同局に特徴的なのは、英語、中国語、スペイン語、韓国語など7カ国語を使用して番組を放送していることである。韓国のグローバル戦略の一端を垣間見たようなアリラン放送の見学であったが、日本「アジア英語」学会にとっては大変名誉なハプニングがあったことも報告しておきたい。私たちはラジオスタジオにも案内されたが、そのスタジオではちょうど韓国の有名なフォークロック歌手が英語でディスクジョッキーを務める音楽番組の放送中であった。なんと、その生放送に本学会会長の本名信行先生が飛び入りで出演されたのである。何の打合せもない、いきなりの出演依頼であったが、本名会長は堂々とディスクジョッキーのインタビューに答えられ、日本「アジア英語」学会の存在を世界中に知らしめられ

たのである。

翌 24 日の主な訪問先は「京畿英語村パジュキャンプ」であった。2002 年以来韓国各地に設立された英語村は、韓国の子供たちに擬似的留学空間を提供する施設として注目を集め、日本でも NHK 語学番組その他で紹介されてきている。しかし、私たちが、京畿道パジュキャンプを訪れた時、そこにはテレビで放映されていたような賑やかな光景はなかった。案内係の女性は「朝一番の訪問なので…」と言っていたが、私たちが施設を出る 12 時近くになってもメインストリートに人影はなかった。鳴り物入りで設立された英語村であるが、最近では、英語村設立当初の新味が薄れてきたことによる「理念の希薄化」をはじめ様々な問題点が指摘されている。

一方、施設見学から戻った私たちには嬉しいサプライズが用意されていた。パジュキャンプで 1 か月間の宿泊研修を受けている 5 人の中・高教員との懇談であった。大学を卒業して数年という若い男女の教員は、われわれの質問に的確に答えてくれたばかりでなく、授業中の書き込みで埋まった英語村特製のテキストも惜しげもなく見せてくれたのである。確認が必要なことであろうが、京畿道の教員なら誰でも無償でこの 1 か月研修に参加できるとも聞いた。私たちが驚いたのは彼・彼女らの英語運用力である。1 名を除いて、海外留学の経験を持たない教師ばかりであったが、流暢な英語で韓国英語教育事情や自分自身の意見を語る姿に強い印象を受けた。彼らが言うには、最近の韓国では教師になるのが難しく、英語力においても TOEIC なら 900 点以上を取得している教師がほとんどのことであった。

最後に、エクスカーションとして希望者のみを募って行われた「デジタル図書館」の見学について簡単に報告したい。韓国国立中央図書館に隣接する「デジタル図書館」は、世

界に先駆けて昨年 5 月に開設された最新の図書館である。“digital” と “library” を合わせて “Dibrary”（ディブラーと発音）と呼ばれている。この図書館が最新の情報機器・資源（たとえば i-phone のような操作感を持つ大型タッチスクリーンや高品質デジタルコンテンツ）を備え、近未来を思わせるようなガラス張りの空間を持つことは予想通りだったが、障害を持った利用者にも図書館資源にアクセスできるよう様々な工夫がなされていたのには感心した。タッチスクリーンなどの主な機器は車椅子の利用者にも操作がしやすいように高さが変えられ、また手指の不自由な利用者のために球形のマウスや特殊な形のキーボードも用意されていた。音声ガイドは手話でも見ることができ、聴覚障害者の利用を助けている。書架の代わりに様々な PC 端末やスクリーンが置かれた、広々とした開放的な「閲覧室」を前にして、未来の図書館の姿を見た気がした。希望者のみに対して行われたのがもったいないほどの経験であった。

この研修旅行はまさに樋口先生ならではの細やかな気配りに満ちた旅行であった。充実したプログラムは言うに及ばず、車中での観光案内から、果ては新型インフルエンザ対策のマスクの準備やのど飴の差し入れにいたるまで、手作りの温かさと真心の伝わる旅行であった。ご自身が旅行の 1 週間前に新型インフルに倒れるというアクシデントを乗り越え、ここまで研修旅行を準備してくださった樋口先生に、参加者を代表して心からの感謝を申し上げたい。